

山村再生担い手づくり事例集Ⅰ～Ⅲの活用と2016年度の活動について

‘16.5.27 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

【山村再生担い手づくり事例集Ⅰ～Ⅲの活用についての検討】

- ・事例集の活用と市民への普及について

- ・事例集の効果の検証について

【2016年度の活動について】

- ・事例集の趣旨の実現に向けて、どのような活動を行うか

「この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。」

- ・事例集交流イベントについて

- ・事例集のホームページ開設について

山村再生 担い手づくり事例集

～流域を元気にする仕掛け人たち～ 洲崎 燈子

事例集のあらまし

先月(2016年3月)、「山村再生担い手づくり事例集Ⅱ」が刊行されました。作成したのは、2010年に国交省豊橋河川事務所が、民・学・官の連携・協働による流域圏全体の発展をめざして立ち上げた「矢作川流域圏懇談会」の山部会です。この懇談会は山、川、海の3部会で構成されており、山部会は流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。このうち水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。この問題の解決をめざし、2013年度に、矢作川流域で中山間地の振興に携わる団体を取



山村再生担い手づくり事例集 第1～3集

材し、その記録をまとめた事例集の作成を始めました。毎年、懇談会メンバーを中心とした20人強の取材者が2～3人のチームに分かれ、合計20以上の団体を取材し、1冊の冊子にまとめてきました。取材先にはまちなかでの活動を通じて中山間地の支援を行うグループも加えました。また2014年度以降は、川と海の活動団体も取材対象としました。

取材にあたって大切にしたこと

この事例集の取材方法は、2008年に環境省中部地方環境事務所が始めた、生物多様性保全活動団体への取材方法を受け継いでいます。その基本方針は「インターネットで拾える情報ではなく、現場に出向いてじっくり話を聞き、その成果を記録する」「取材先の自慢話だけではなく悩んでいる部分、いわば“光と影”を記録する」「話を聞く過程を大事にする」といったことです。物書きのプロではない取材者たちは取材先とやりとりを重ね、編集会議でお互いのレポートについて意見を出しあい、一生懸命最終稿をまとめました。その結果3年間で、心のコもった64篇の取材記録がまとまりました。



奥矢作森林塾(岐阜県恵那市)



first-hand(愛知県豊田市)



佐久島Oyaoya cafeもんべまるけ
(愛知県西尾市)

新しい交流の芽吹き

取材を通じて、実にさまざまなことがわかりました。たとえば高齢者の皆さんが独創的かつパワフルな活動を展開している長野県根羽村、地域愛に裏付けられた活動が浸透している岐阜県恵那市、多数の若者がターンし、きわめて多数の多様な活動が生まれている愛知県豊田市、長い林業の歴史に支えられている愛知県岡崎市といった地域特性です。また、取材を受けた方が翌年取材者として参加したり、懇談会のメンバーになったり、取材者と取材先が意気投合してコラボレーション企画が生まれたりといった、新しい交流も生まれました。川と海の関係者が取材者と取材先の双方に加わったことで、懇談会で課題となっている部会間の連携を強化することにもつながりました。

3冊の「山村再生担い手づくり事例集」には、持続可能で魅力的な流域づくりのヒントと、老若男女、多様な人びとの「人生をもっと幸せに生きるための言葉」が詰まっています。豊橋河川事務所のホームページで見られますので、ぜひご覧ください。

(すざき とうこ、主任研究員)

楽しみながらいい地域と、 いい川をつくろう

近藤 朗

「山村再生担い手づくり事例集調査」の母体となったのは、伊勢・三河湾「流域圏再生プロジェクト調査」で、これは、生物多様性条約締約国会議COP10(2010年)に向けた市民団体活動調査でした。この調査(2008~2010年度)では、想像以上に様々な繋がりがありました。特に今まで希薄だった愛知・岐阜・三重県間の交流が進み、後に3県連携による「22世紀の奈佐の浜プロジェクト(2012年~鳥羽市答志島海岸清掃)」その他へと発展していきました。

流域圏再生プロジェクト調査の系譜(2008~2015年度)

実施時期	調査団体	内容・テーマなど
I 2008~2010年度 伊勢・三河湾流域圏再生調査 (環境省委託、助成事業)	72団体	愛知・岐阜・三重/山・川・里・海 2009年度「営み」の視点を重要なテーマに 2010年度 揖斐・長良川流域での地域再生、山村担い手
II 2011~2015年度(継続中) 22世紀の奈佐の浜プロジェクト (自主事業で流域圏調査継続)	50団体以上 (活動参加)	2011年度 愛知・岐阜・三重県追跡調査、各県連携会議 2012年度 奈佐の浜海岸清掃 スタート 2013年度 3県流域エクスカージョン スタート
III 2013~2015年度(継続中) 山村再生担い手づくり事例集調査 矢作川流域圏懇談会 山部会	64団体	2010年度 矢作川流域圏懇談会 開始 2013年度 山村再生担い手づくり事例集調査 スタート 2014年度~ 川、海も含めた調査に

事例集調査には3年通じて参加しましたが、今年度の調査では新たな伝説が生まれました。長くこの調査に関わっている私でも、これほど壮絶で抱腹絶倒な取材は経験したことがない!根羽村の幻の演芸集団「天下杉」との出会いです。

取材は丸一日に及び、売木村での慰問活動の見学から、取材と称する夜の宴会まで、圧倒され続けました。これほどのた打ち回って床を叩きながら笑ったのは、いつ以来か?「自分たちが楽しまなければ、人を喜ばせられない」という自信に満ちた言葉は、山村再生の重要なキーワードですね。平均年齢が75才を超えたという彼女たち、後日メンバーの一人が仕事として高齢者福祉施設で、自分より若い方の介護を元気にされているのを見た時に、担い手とは何かを十分に思い知らされました。

健全な流域圏をめざすにしろ、山村再生にしろ、重要なのは人が中心であること。持続可能な営み、自立による地域再生と、そこでの人材(担い手)育成が大きなテーマとなります。それは環境保全とも密接に繋がっています。しかしその認識、危機感、実は都市と地域で大きなギャップがあります。都市住民の役割は、地方の危機感を真摯に受けとめ、支えていくことにあると感じています。

私が本業としている川づくりにおいても、「川と人との繋がりが損なわれたことにより、様々な問題が生じた。今こそ、川と地域の関係を再構築しなければならない」と提言(1999年、河川審議会)されて久しいです。その様な意味では、最近になって市民工事による「小さな自然再生」という取組みも始まっており、事例集に掲載された矢作川森林塾の河畔林整備や家下川周辺での水路再生工事(矢作川水族館など)も、その先駆者と言えます。

多自然川づくりも、今の課題はむしろ管理者の人材育成と継続的なシステムづくりへと移行しており、担い手づくりと地域再生は共通のテーマだとわかります。こちらら大事なのは、「自分たちが楽しまなければ、いい川はできない」ですね。

(こんどう あきら、伊勢・三河湾再生交流会議)



22世紀の奈佐の浜プロジェクト



天下杉の皆さん